

その日が来れば

イザヤ書 11 章 6 節-10 節

賈 晶淳

狼は小羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く。7 牛も熊も共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛もひとしく干し草を食らう。8 乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、幼子は蝮の巣に手を入れる。9 わたしの聖なる山においては、何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように、大地は主を知る知識で満たされる。10 その日が来れば、エッサイの根は、すべての民の旗印として立てられ、国々はそれを求めて集う。そのとどまる場所は栄光に輝く。

12 月に入りアドベントも始まりました。本文はこのアドベントの時期に多くの人々に読まれ、語られて来たイザヤの預言の一部です。ここからは預言者イザヤの豊かな感性と想像力を感じ取れます。現実ではありえない話ですが、預言者が何を語ろうとしているのかが良く見える内容です。この話は決してどこかの動物園の新しい試みの話ではなく、私たち人間の世界でも肉食動物と草食動物が共存せざるを得ないことを前提とし、その中で共に生きることを夢見る内容であります。時代的背景からここで言う肉食動物とは、北の国アッシリアを指します。古代世界は現在と違って理性が働かない世界、弱肉強食の世界観が主であった世界でしたが、イザヤはその考え方とまるっきり異なる思想を提案しているのです。それはシャロームです。シャロームとは暴力がない状況で、暴力とは自分と異なるものを力で排除する行為です。

12 月 3 日の真夜中に韓国の尹錫悦大統領が戒厳令を宣言し、軍を、国会を始めとする幾つかの場所に送り込み武力で制圧しようとした事件が起きました。幸い数時間後に戒厳令の解除を求める国会での議案が通り、戒厳令は失敗に終わりました。戒厳令が通っていれば今頃韓国社会は武力による統治が行われ、これまで大統領や政権と対立していた者は全員拘束され、排除されていたでしょう。今回は力もない大勢の市民たちが迅速な動きで国会を護り、軍や警察に対峙し、また、軍も命令を積極的に実行していなかったことは民主主義という理性が働いた結果だと思えます。その上一人のけが人も出なかったことに驚いています。

このようなことが本文におけるイザヤの願いであり、シャロームのことではないかと考えています。今日の題にした「その日が来れば」は 10 節に出て来る言葉で、これも偶然ですが、この日、礼拝の祈りの中で石田美智代さんが「その日が来れば」、「그날이 오면」(クナリオミョン)と韓国語で祈られたことが、今思うとこの文章を纏めるのにあたりピッタリの言葉であったことに改めて驚いております。「その日が来れば」という言葉は 1987 年市民が軍事政権を終息させようとした時に歌われた歌のタイトルであり、この言葉を聴くと直ぐ、民主化の過程を思い浮かべるのです。殆ど忘れかけていた独裁、軍事政権、そして戒厳令をこの数日間、心身共に震えながら思い出しています。民主主義は血を食って成長するという言葉もありますが、今回は流血事件に至らなかったことで民主主義へ更に一步前進する機会になると思えます。

今年に入りニュースで闇バイト強盗事件の話をよく聞くようになりました。格差問題や失業率増加に物価高騰などが原因で、社会が不安定になったためだと思えます。ルカによる福音書 10 章の「良きサマリア人」のたとえ話は、善良なる人の模範的行為を示していると同時に、社会的観点から読めば追いはぎ、強盗事件の話です。国家的な次元での話ではありませんが、物理的な力で人の身体に怪我をさせ、命や所持品を奪い取るのはやはりシャロームを脅かす行為です。その意味では当時の社会も現在の社会と同じ状況が考えられますが、それは社会的不安を助長する事件に繋がり、たとえ話にも引用されていると思えます。このような時に治安だけを問題にするのではなく、社会的に不安を起こす要因を分

析し、根本的な解決に努めるのも必要だと思います。

今日、私たちは何を望むべきでしょうか。戦争の中止だけではありません。日本が豊かだった時代も終わり、たとえ闇バイトであってもしようとする若者が増え、人の命まで奪ってでも自分のみが生きれば良いという、倫理感を失った人々が徐々に増えて行くでしょう。これは日本だけの問題ではなく、今は全世界で起こっている現象です。リスクが少ない安全な社会を作り、社会的不安要素を減らそうとするのは夢を見ることだけでは足りないと思いますが、社会共通の待望として夢から始めても良いと思っています。

預言者イザヤは前八世紀の預言者の中で最も重要な人物で、メシア預言の殆どがこのイザヤ書を通して語られています。本文の10節もメシア預言の一つです。但し、聖書で預言者やメシアについて語る時に注意して見て欲しいのは、何故その時代が預言者やメシアを求めているのかというところです。預言者の登場を求め、メシアを待つ社会とは、その声が強ければ強い程その社会は大分荒れている不安定な社会だと見た方が良いでしょう。

しかも、待望の預言者やメシア的人物が現れたとして社会が良くなるとは限りません。聖書はどの時代においても社会を改善させるのに、預言者やメシアの力だけでは無理であることを教えています。イザヤの時は南北分断王国の時代であり、北のイスラエル王国は既にアッシリアの支配の元にあり、南のユダ王国の王都であるエルサレムが攻撃を受ける大変恐ろしい時期を迎えていましたが、幸いアッシリアの内部事情で軍が撤退することが起きます。それによってユダ王国は暫くの間シャロームの時代を味わいますが、その時にヒゼキヤやヨシュア王の指導の下で宗教や社会制度の整備が行われ安定した時期を享受するようになります。

即ち、預言者やメシアが現われたとしてもすべてが神任せでは不可能であるということです。現代社会では市民全てが参加する社会作りが勧められています。その上優れた政府やリーダーがいれば社会のシャロームへの回復は早くなると思います。

待降節を迎えて私たちは何を待っているのかについてずっと考えていました。本文はメシアを待つことについて描いたものだと思います。それを理解するためには私たち各自の想像力が必要になります。まず、この非現実的な話を真似しようとする人はいないでしょう。しかし、考えてみると私たちが生きている世界は肉食の猛獣と草食の家畜と一緒に暮らしている世界です。勿論動物世界では弱肉強食の状況は自然の一部であります。それを人間が邪魔すると生態系は秩序を失います。イザヤはそれを言おうとしているわけではありません。人間世界を説明しているのです。人間は皆同じように見えますが、自然界以上に暴力の世界です。侵略戦争を起こし、ジェノサイドを行ない、今回韓国で起きたように銃剣で政敵を排除し、国民を支配しようとする勢力が存在します。勿論強盗も暴力です。同じく飢えや失業などを放置するのも暴力だと思います。イザヤの本文は暴力がない世界を描いているものです。この話は今から2700年前の話です。しかし、この話を私たちは今も感動しながら読んでいます。このようなことが普遍的な待望だと言えるでしょう。この待降節に「その日が来れば」とは、神の国、シャロームの世界を願い、その働きに参加することだと思います。

(2024年12月1日証詞より)